

感染症

かんせんしょう



K-style

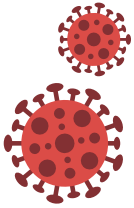
医療図書館

Vol.74

2024 新年号

新しいコロナウイルスの出現は約4年前でした

2019年までコロナウイルスは、通常の「感冒」（かんぼう・いわゆる「カゼ」）の原因でした。ただし例外的に、動物のコロナウイルスが変異して人に重い病気を引き起こしたことがあります。2002年末に中国広東省で発生したSARSコロナウイルス、2012年にサウジアラビアで発生したMERSコロナウイルスがそれに該当しますが、これら2つの病気は幸い日本で流行がありませんでした。しかし、2019年末に中国湖北省武漢で発生した新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）は、日本も含めた世界中で大流行（パンデミック）となりました。



川崎医科大学附属病院 小児科 部長 中野 貴司

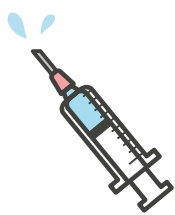
日本小児科学会小児科専門医・指導医、日本感染症学会専門医・指導医、ICD 制度協議会認定インフェクションコントロールドクター（ICD）、国際渡航医学会認定資格、臨床研修指導医

わが国も経験したパンデミック

わが国における新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の最初の患者さんは、2020年1月に報告された武漢へ渡航歴のある人でした。まず、ダイヤモンド・プリンセス号への対応や渡航の制限など水際対策が中心に行われました。その後、国内でも感染は拡大し、全国の学校一斉休業や緊急事態宣言は、皆さんの記憶にも鮮明なのではないでしょうか。私たちがこれまでに経験したことのない感染症の脅威でした。大人の日常から子どもたちの学校生活まで、すべての人々がこの感染症の流行により大きな負担を強いられました。

治療と予防

「手洗い」「咳エチケット」「密を避ける」などは、あらゆる感染症の予防に有効ですが、COVID-19の流行により万人の知るところとなりました。パンデミックが始まった頃、この病原体に有効な薬剤はひとつもなかったですが、2020年5月にレムデシビルという薬が使えるようになりました。その後、薬剤の種類は増えてきましたが、インフルエンザと比べるとまだまだ広くは使用されていない状況です。わが国でワクチンの接種が始まったのは2021年2月、パンデミックが発生して1年を経過した頃でした。まず医療関係者への接種が始まり、高齢者、基礎疾患のある人、さらには国民の皆様すべてへと対象が拡大されました。



変異するウイルス

COVID-19の病原体であるSARS-CoV-2は、その遺伝子を変異するウイルスです。最初に武漢で発生したことから、流行するウイルスのタイプは何度も変化しました。2021年5月大型連休頃のアルファ株、同年夏のデルタ株など大きな流行の主体となった、よく知られた名称の変異株もあります。ウイルスが変異すると、それに対応する免疫力ともズレが生じます。すなわち、一度罹った後、異なるタイプのウイルスに再度罹ったり、ワクチンで付いた免疫が十分に働かないということがあります。同様にしばしば変異する病原体としてインフルエンザウイルスがよく知られています。SARS-CoV-2は変異した異なるウイルスが1年の間に何度も流行したりして、変異の頻度が高い印象がありました。

オミクロン株の流行と5類感染症への移行

2022年初頭から流行しているウイルスは、オミクロン株です。オミクロン株の感染力は強く、多数の患者さんが発生しました。しかし幸いに、肺炎などの合併症を起こすリスクは、アルファ株やデルタ株に比べて頻度が低いことがわかっています。また、罹患やワクチン接種により、私たちの多くはSARS-CoV-2に対する免疫を持つようになりました。これらのことを踏まえて、COVID-19は2023年5月から感染症法上の5類感染症、すなわちインフルエンザなど他の感染症と同様の位置付けとなりました。

感染症への対策

備えは万全に

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が法令上は一般の感染症の扱いになつたからといって、これまで行ってきた対策をすべて止めてしまつてよいというわけではありません。コロナ以前は毎年冬に流行していたインフルエンザもそうですが、感染症は時に大きな流行を起こします。また、高齢者や基礎疾患のある方、あるいは年少児などが感染症に罹ると、しばしば重症化します。健康な人でも一定の頻度で合併症をきたすことがあり、適切な予防や治療を常に心がけるべきです。

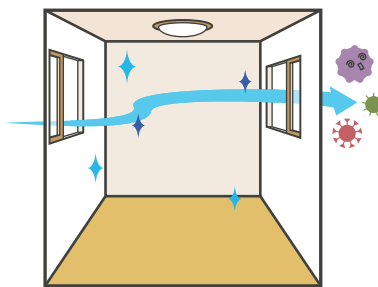
感染症では発熱などを認めますが、重症化の徴候を見逃さないように、チェックリストに示すような症状がある場合は、早急に医療機関への受診が勧められます。

早急に医療機関への受診が勧められる症状

- 38℃以上の発熱が3日間以上続く
- 意識障害（反応が鈍い、あるいは過度に興奮している）
- 尿の量が少ない（脱水の徴候）
- 食欲が全くない
- 頭痛や腹痛がとても強い
- 呼吸困難（息苦しい、呼吸回数が多いなど）

感染経路

病原体の種類によっても異なりますが、ウイルスや細菌は人の粘膜や皮膚から体内に侵入します。特に粘膜は侵入門戸となることが多く、病原体が付着した手指を舐めれば口腔粘膜や呼吸器粘膜から、目を手で擦れば目の粘膜から感染します。また、呼吸器感染症でよく知られた感染経路は「飛沫感染」です。患者さんや無症状感染者の唾液や咳しぶき（飛沫）には病原体が含まれています。飛沫は1m程度の距離までは容易に飛び散りますが、それより離れていけば簡単には感染しません。しかし、密な環境や食事中の会話は、飛沫への曝露機会を増し感染リスクを高めます。大声や換気の悪い空間も感染機会を増やします。日常生活においてこれらリスクの高い状況を回避することは、感染予防に有効です。



手洗いやマスクの効果

流水での手洗いにより、付着した病原体を洗い流すことができます。指先、爪と皮膚の間、指の間、手のひら、皸（かさ）の間、手の甲、手首と余す所なく念入りに洗いましょう。石けんを使用すれば、さらに効果的です。流水での手洗いができない場合は、手指消毒用アル

コールによりウイルスや細菌の感染力を失わせる方法もあります。また、マスクは飛沫から身を守ることと併せて、自分から飛び散る飛沫を少なくすることができません。すなわち、咳エチケットと同様に、他人への感染予防にも有効な対策です。



ワクチンの活用

感染症を予防する目的で、当該病原体に特異的な抵抗力すなわち「免疫」と呼ばれる力を付ける手段が予防接種です。そして、予防接種に用いる医薬品は、ワクチンと称されます。感染症に罹る前に、罹ることを防ぐ力が備わるなら、こんなにありがたいことはありません。科学者たちはこれまでに、エドワード・ジェンナーの天然痘ワクチンに始まり、ポリオ（小児まひ）や麻疹（はしか）などいかなる感染症に対するワクチンを開発し、その普及により消滅した病気もあります。ワクチンという予防手段がある感染症に対しては、それを有効に活用することも大切です。

